琉球大学学術リポジトリ

平成23年度（2011）発達支援教育実践センター事業報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2012-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24194

平成23年度（2011）発達支援教育実践センター事業報告

本センターは支援を必要とする子どもたちへの教育に関する基礎的研究、臨床的研究、そして教育方法の開発等を行うとともに教育相談や研修活動を通じて地域社会に貢献することを目的としている。平成19年４月より特別支援教育がスタートし、試行錯誤の取り組みが学校現場において行われている。発達支援教育・特別支援教育に対する現場からの本センターへの期待はますます大きくなることを見据えて、平成18年10月より現場での取り組みをサポートするとともに子どもたちへの支援を行いながら学生、現職教育、支援員の実践教育、実践研究を行うトータル的な実践活動『トータル支援活動』をスタートさせた。当センターの中心事業となる「トータル支援教室」事業は第１次計画として大学を中心とした活動を活性化することから始まった。

当センターにおいて「トータル支援教室」は中心的な事業であり、今まで５年半で87回の支援のための企画案を実践してきた。地域の子どもたちが支援を受け、保護者の子育てを応援し、現職教員、保育士、支援員、関連領域の専門家のリカレント教育の機会を提供し、大学院生や学生に実践教育の場を与え、行政などと協力して地域に貢献し、実践研究を深める支援を行っていることで、「トータル支援教室」と呼んでいる。また、子どもたちとの関わりを通して子どもの特性を多角的に捉え、支援教育の多様性を追求し総合的包括的に支援していく上でも「トータル支援教室」と呼んでいる。

センターの支援活動は６年目に入り、大学を拠点とした地域貢献および教育、研究活動を中心とする第１次段階から、「発達支援プログラムの構築」と地域への出前支援を目指す第２次段階「トータル支援教室」、「実践事例研究会」、「相談支援」等の出前支援の取り組みが定着し、昨年度は第３次計画として大学から離れた離島・へき地との協働による地域支援を目的に位置づけ「人材育成のための実践力養成システムの構築」を目指してきた。そして本年は３月、６月、10月に出前支援を行い、７月には八重山の現地スタッフを大学へお招きし、実践研修会を実施した。11月には第４次計画として念願の地域拠点型の八重山の地域スタッフが中心となった「トータル支援教室 in 八重山」が八重山教育事務所を中心に、石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会との共催で実施することができた（図１、参照）。

さらに本年度から国頭地区の出前支援として金武町で、当センターに参加する子どもたちと国頭地区の子どもたちを交流させる日帰りキャンプ「トータル支援教室ＩＮ　国頭」を開催することができた。積極的に離島・へき地に出向き、地域の土壌に触れながら子どもたちや発達支援教育に携わる先生や支援者と関わり、ともに学び合うことができた。

また、「トータル支援教室の支援」を学校現場に還元し、特別支援員による「授業実践」として取り組みが行われた。特別研究員の瀬底正栄が昨年度に引き続き、国頭地区の教育課程研究会において、トータル支援教室で行った取り組みを授業実践として行った。

大学を拠点とする定例のトータル支援活動においては一昨年に引き続き、「読谷村教育委員会の特別支援教育支援員の実践力養成支援」、昨年度から参加した「那覇市教育員会」も支援員実践力研修と位置づけての参加があった。特別支援教育支援員をトータル支援教室で受け入れ、発達支援教育実践についてともに学ぶことができた。

12月に開催された沖縄県特別支援教育研究会に当センターも共催となり、専任や特別研究員が県内の実践研究を報告された教諭たちとともに議論する場が生まれた。また、９月には弘前大学にて国立大学法人障害児教育関連センター連絡協議会の連携プロジェクト「小学校教育養成プログラムにおける特別支援教育スタンダードの開発」によるシンポジウム、テーマ「特別支援教育に関する学修プログラムの現状と課題～教員養成・現場研修・地域連携等の視点から～」において話題提供の依頼を受け、「学生教育・現職研修・地域貢献の有機的連動的ネットワークの構築」と題してトータル支援教室の取り組みについて報告した。

本年度は、八重山教育事務所、教育委員会、公立学校、特別支援学級などの教育機関、附属小・中学校との連携のもと、毎年、実施しているセンター事業を始め、３年目に入った「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム」、今年から「海プロジェクト（日本

財団)」、大学中期計画実現のための「総合教育相談室」等の事業を行った。特に中期計画実現へ向けて、附属小学校との連携を深め、「教育支援」、「相談支援」への一層の充実を目差した。

平成24年２月には田中千穂子氏（花クリニック、元東京大学教授)、古田直樹氏（京都児童福祉センター）を招聘し当センターの本年度の公開セミナーを行った。その際、本年度の「トータル支援教室」の事業による実践研究の成果報告およびセンター事業の公開報告を行った。３月に行われた『21世紀おきなわ子ども教育フォーラム』の研究報告会においても再度、八重山地域との連携プロジェクト「トータル支援教室 in 八重山」についての事業報告を行った。

当センターの地域貢献への取り組みは県内、県外に認知され、期待の高まりとともに、より一層の地域貢献への努力が求められている。

発達支援教育実践センターの参画プロジェクト

①21世紀おきなわ子どもフォーラム

- 教育学部における『21世紀おきなわ子ども教育フォーラム』へ参画し、八重山出前支援を実施した。

事 業 名：八重山教育事務所との連携による特別支援教育支援員の実践養成講座の構築

実施期間：平成23年４月～平成24年３月

②海を活かした教育に関する実践研究（日本財団）

事 業 名：『海を活かした発達障害児の支援教育プログラムの開発』

実施期間：平成23年３月～平成24年３月

８月下旬にアメリカカリフォルニア州ロサンゼルスへ支援の実際についての情報収集および発達障がい児の通う学校および支援施設等の視察を行った。

視察機関：平成23年８月22日～平成24年８月30日

中期計画プロジェクト

大学中期計画のための「総合教育相談室（仮想)」事業

実施期間：平成23年３月～平成24年３月

連携プロジェクト

機 関 名：国立大学法人障害児教育関連センター連絡協議会

研究題目：「小学校教員養成プログラムにおける特別支援教育スタンダードの開発」

研究機関：平成20年度～平成23年度（４年間）

研究代表者：林安紀子（東京学芸大学教育学部）

①障セ協関連自主シンポジウム

テ ー マ：特別支援教育に関する学修プログラムの現状と課題

企 画 者：林安紀子（東京学芸大学）

司　　会：橋本創一（東京学芸大学）

話題提供：是永かな子（高知大学)、浦崎武（琉球大学)、川合紀宗（広島大学)、河合康（上越教育大学)、林安紀子（東京学芸大学）

日　　程：９月25日(日)　13時～15時

会　　場：弘前大学総合教育棟　306号室

発達支援教育実践センターの地域連携プロジェクト

：関係機関および付属小・中学校への共同研究および連携支援

以下の関係機関への支援、および連携による共同研究、共同支援を行った。教育事務所、教育委員会、学校、特別支援学級などそれぞれの関係機関の規模、形態、ニーズに合わせた連携の在り方を模索した。

センター主催

①機 関 名：八重山教育事務所　活動名：島嶼地域出張教育相談支

活動内容：保護者、教員への発達相談、教育心理相談、学校訪問相談

②機 関 名：八重山教育事務所　活動名：トータル支援教室の出前支援、実践事例研究会

活動内容：トータル支援出前教室、事例研究会による特別支援教育支援員実践力養成支援

③学 校 名：附属小学校　活動名：定例の巡回相談（月１回)

④学 校 名：附属小学校　活動名：特別支援教育研修（10月)

⑤機 関 名：国頭教育事務所（場所：ネイチャー未来館）

活 動 名：トータル支援教室の出前支援

地域支援プロジェクト計画

第１次計画：大学拠点型（参加型）連携支援体制の構築（近隣地域支援）

（現職教員、学生、支援員、高度専門

職業人のための協働による実践力養成支援）

第２次計画：出前型連携支援体制の構築（出前離島・へき地支援、実践力養成支援）

第３次計画：地域との協働による実践力養成システムの構築

（離島・へき地との協働・連携による支援、実践力養成支援）

第４次計画：地域拠点型連携支援体制の構築（離島・へき地主導による実践力養成支援）

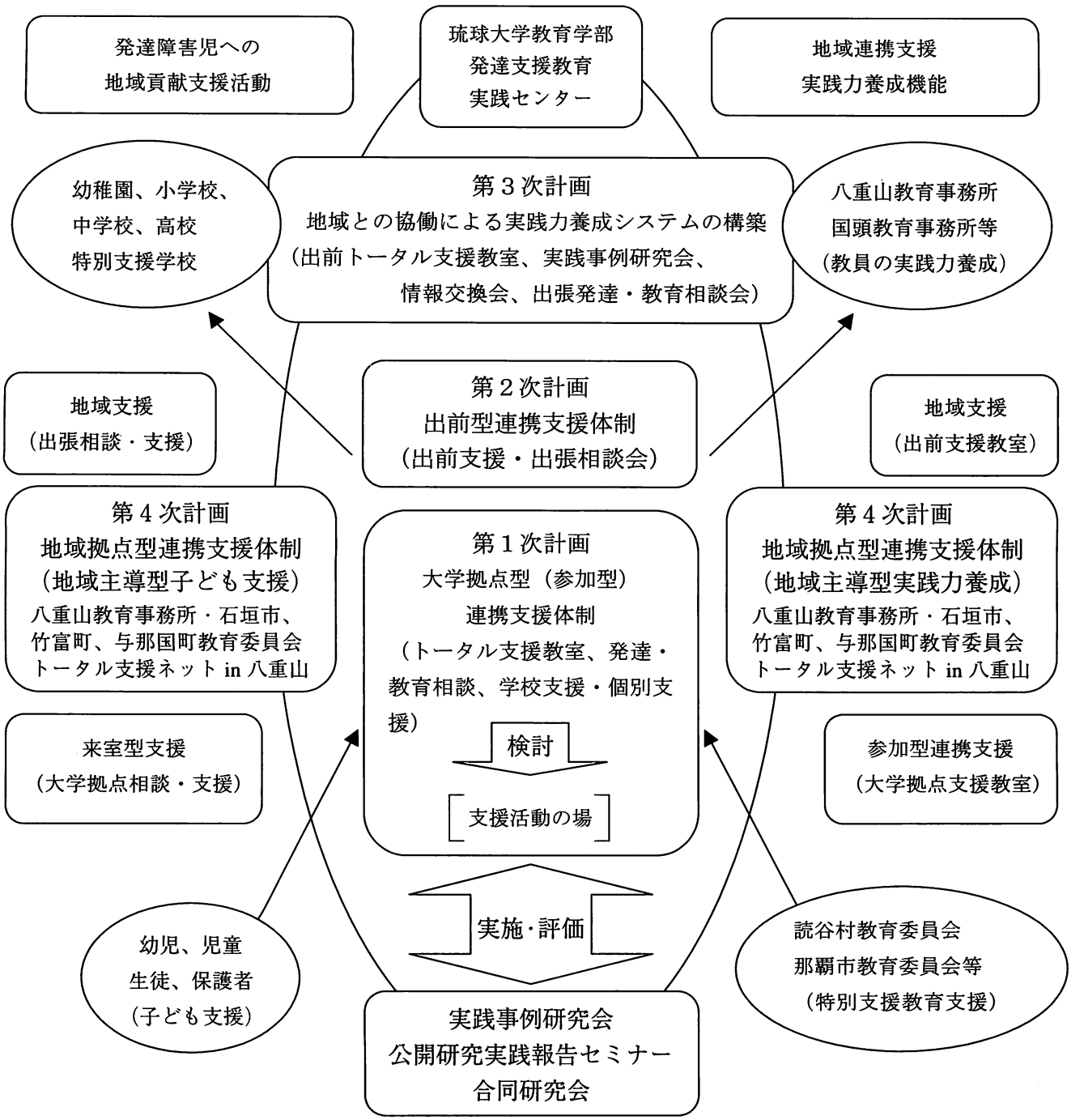

図１　地域支援プロジェクト計画

活動内容：トータル支援出前教室（日帰りキャンプ）

⑥機 関 名：読谷村教育委員会　活動名：特別支援教育支援員養成支援

活動内容：トータル支援教室における特別支援教育支援員の実践力養成支援

⑦機 関 名：那覇市教育委員会　活動名：特別支援教育支援員の養成支援

活動内容：トータル支援教室における特別支援教育支援員の実践力養成支援

センター共催

①機 関 名：沖縄県特別支援教育研究会
活 動 名：沖縄県特別支援教育研究大会
内　　容：特別支援教育に関わる記念講演及び分科会等

１．実践教育・臨床支援活動

中核の活動である『トータル支援教室』では、大学教員、学生、院生、現職教員、支援員等が参加して発達障害のある子どもたちや気がかりな子どもたちの参加による実践教育支援、及び実践研究を目的として定期に集団支援、個別支援、連携支援を行った。特に本年度は那覇市教育委員会との連携のもと特別支援教育に携わるヘルパーが実践力養成の目的により参加し、現職教員、学部学生、院生、特別研究員、特別支援教育支援員等の参加者により協働の多様な取り組みとなった。この『トータル支援活動』は地域支援を行うとともに学生、院生、現職教員、特別支援教育支援員等にとっては発達支援教育のための実践トレーニングの場となる。発達支援教育実践センターでは発達支援における地域貢献及び特別支援教育に貢献する教員を育てることを大切な課題として位置づけ、実践教育・臨床支援活動に取り組んでいる。

(1) 個別実践教育・臨床活動

本センターでは、個別臨床活動支援として母親面接、教員面接、子どもへの実践教育臨床支援を行っている。その支援内容は発達支援、教育学習支援、適応支援、子育て支援の４つ柱を中心としている。毎年度開催される発達支援セミナーにおけるアンケート結果から当センターに対する期待の大きさが見られる。一部の保育や学校現場では支援体制が整ってきたが、その支援体制が機能するかどうかが今後の発達支援教育・特別支援教育の課題である。

相談機関として地域貢献の必要性を訴える要望と同時に、学校内部の具体的な取り組みの発展に関する支援についての期待があがった。学校現場は専門性の高い信頼できる相談機関を求めており特別支援教育のスタートによる子どもたちの発達支援や学校現場の戸惑いへの支援が課題となっている。本センターは新しい施設が昨年度完成し、本年度から本格的に機能し始めたところであり施設機能を活用することにより、さらなる一層の地域貢献を目指している。

(2) 集団実践教育・臨床活動

来所された子どもたちのなかで集団適応を困難とする子どもたちには『トータル支援教室』に参加してもらった。スタートして５年が過ぎ『トータル支援教室』に参加している子ども、２人の支援が終結した。従って２人の新しいメンバーが新たに加わった。この活動は子どもたちを支援するとともに大学と小・中学校が連携することにより発達支援教育・特別支援教育の支援体制のより良い方向性を求める活動である。本年度は参加の長い子どもたちは６年目に入ったこともあり実態がしっかりと捉えられ、支援の成果が見られるようになった。子どもたちが落ちついてきたことで個々の子どもについての学校等との連携は減少した。

今後、子どもたちに対してきめ細やかな支援が必要になるにつれて地域の支援機関とのネットワークの輪を広げていくための地域への当センターの取り組みの認知度を高めることが課題となる。そこで、引き続き、スタートから参加している浦添市立沢岻小学校の子どもたちやそれ以外の地域の子どもたち、さらに支援者として一昨年度から当センターが提供している『発達支援教育実践Ａ』、『発達支援教育実践Ｂ』の演習を受講している教育学部、法文学部の学生、大学院生等、専門専修に限らず多面的な視点をもったメンバーが取り組みに参加することになった。

また、平成21年度から、出前支援として東村立東小学校の通常学級で『トータル支援教室』で行った取り組みを行うなど現場の通常学級の中に複数在籍する支援が必要な子どもたちへの『トータル支援教室』の実践の成果を還元していくことにも取り組んでいる。

また、このトータル支援教室は、学生、院生、現職教員にとっては発達支援教育・特別支援教育のための実践力を得ることが可能となる活動である。当センターはこの教室に参加することにより子どもたちと関わる視点を学んでもらい、その成果を、現場の発達支援教育・特別支援教育へ還元することを目的としている。平成22年度は、平成20年度から参加している読谷村教育委員会に加え、那覇市教育委員会の支援員が実践力を養成する目的で活動に参加した。本年度におけるこの教室での実践研究の成果はセンター主催の発達支援教育実践セミナーにおいて、平成24年２月に報告した。

(3) 実践教育・臨床支援ケースの概要

平成23年１月から平成23年12月までの１年間の月

別セッション数を表1に示した。来所相談、訪問相談を合わせて、セッション数は総計507セッションになった。昨年度は468セッションであったので39セッション増加した。トータル支援プログラムの個別支援セッションが昨年度17セッションから51セッションへと増加した。多くの参加している子どもたちは5年近く通い続けており、安定してきている。個別支援セッションは特別研究員と大学院生の担当する子どもに限定して行った。

またトータル支援プログラム外の個別支援のセッション数は74セッションであり、昨年度の38セッションを大きく上回った。昨年度支援を行った事例は93であったが、今年は97事例であった。昨年度より支援を行った対象は4事例増加した。

また、親面接も昨年度に比べ38セッション増加した。昨年度から子どもの行動観察という項目を設けた。本年度は65件、子どもの行動観察（アセスメント）を行った。そしてその行動アセスメントにそって保護者や教員とともに考える形態の相談を行った。

本年度はセンターに相談員が加わったことにより、多くの子どもや保護者と面接やセラピーをすることができたことがセッション数の増加の要因である。

表1　臨床活動　セッション数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
親面接（カウンセリング含む）セッション数	9	8	8	13	13	12	15	15	9	15	16	15	148
教員面接（スーパーヴィジョン含む）セッション数	9	6	9	18	7	17	7	17	9	15	17	21	152
子どもの行動観察（アセスメント）	8	9	8	7	4	2	3	7	3	4	7	3	65
子どもへの発達・教育学習・適応支援（心理療法含む）セッション数	5	2	5	9	6	4	9	8	5	5	8	8	74
実践トータル支援教室（個別支援）セッション数	6	3	0	4	10	8	7	3	0	2	3	5	51
実践トータル支援教室（集団支援）セッション数	2	1	1	1	2	3	2	1	0	2	1	1	17
合　　計	39	29	31	52	42	46	43	51	26	43	52	53	507

(4) 実践教育・臨床支援ケースの診断別内訳

表２には診断別内訳を示した。相談対象のなかで多い障害は昨年度と同様に自閉症であり約28.9%を占め、アスペルガー障害を含めると39.2%となり全体の約４割を占めた。情緒障害の相談が昨年度より９事例増加した。

表２　臨床活動　診断別内訳

診　断　名	事例数
アスペルガー障害（高機能自閉症）	10
注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）	10
精神遅滞（知的障害）	11
広汎性発達障害（自閉症）	28
学習障害（ＬＤ）	8
情緒障害（虐待、緘黙、不登校含む）	12
聴覚障害	0
言語障害	1
ダウン症候群	8
境界知能	2
身体障害	2
その他	5
計	97

(5) 実践教育・臨床支援ケースの地域別支援内訳

相談ケースの地域別内訳を以下の表３に示した。昨年と同様に宜野湾市、那覇市、浦添市、西原町、中城村などの大学周辺の市町村からの相談（約60.9%）を多く受けた。また、継続支援を行ってきた八重山地区では専門的立場で支援を行う人材の育成が課題となっている。発達障害のある子どもの保護者の不安は高くなり、大学の支援の必要性が大きくなっている。

本年度は昨年度に引き続き教育学部における21世紀おきなわ子ども教育フォーラムの一環として八重山教育事務所と連携し、石垣市に出むき相談（26.8%）を多く受けた。

表３　相談ケースの地域別内訳

相談ケースの地域別内訳	事例数
宜野湾市	31
那覇市	1
浦添市	5
西原町	20
うるま市	3
中城村	2
豊見城市	2
南城市	0
与那原町	0
南風原町	1
石垣市	26
竹富町	5
その他	1
総　計	97

(6) 附属小学校支援

附属小学校に３月、５月、６月、９月、11月、12月において巡回相談を行った。23人が相談対象となり担任、コーディネーター、養護教諭、校長と情報交換および支援について話し合った。合計年間延べ38人（重複含む）教員面接、行動観察をおこなった。

表１　相談　人数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
教員面接（スーパーヴィジョン含む）セッション数	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	4
子どもの行動観察（アセスメント）	0	0	0	0	2	8	0	0	14	0	5	5	34
合　計	0	0	1	0	3	8	0	0	14	0	6	6	38

2．社会教育活動

平成18年10月より支援を必要とする子どもたちと特別支援教育について学ぶ意欲のある学生、院生、現職教員、さらに子どもたちの通う学校がともに関わりをもつ実践トータル支援教室をスタートさせた。専門機関としての大学の発達支援教育実践センターと公立の小学校とが連携して子どもたちを支援することがこの活動のねらいである。

(1) 実践トータル支援教室

保護者や学校から軽度発達障害児における特別な支援を必要とする子どもたちの実践支援の要望を受けて、実践トータル支援活動を行っている。以下のような目的で活動している。

①支援を必要とする子どもたちやその保護者への支援

②支援活動を通して子どもたちやその保護者への特別支援教育について学ぶ学生や現職教員への実践教育支援

③学校・教育行政との連携支援

④支援活動を通して子どもたちについての理解の方法、支援の方法など、実践に役立つ支援に関する研究

支援活動は、学部学生、大学院生、保育士、小学校、中学校、特別支援学級、特別支援学校の現職教員の参加により子どもたちへの支援として個別支援活動と集団支援活動、保護者同士の情報交換を行っている。以下のような支援課題と目的で活動をしている。

1）個別支援活動

発達支援においては関係性に基づいた「生きる力を引き出す」ことを目的とし、教育学習支援においては発達の視点に基づいた「生きる力を育てる」ことを目的としている。

2）集団支援活動

適応支援においては情緒の豊かさとメンタルケアに基づいた「生きる力を支え活かす」ことを目的としている。

3）子育て支援活動

子育て支援においては子どもをもつ親の気持ちを支え、子どもたちの「生きる力を大切にする」子育て支援を目的にしている。

水曜日、月２回のペースで琉球大学教育学部発達支援教育実践センターを会場として以下のよう支援活動を行った。ここでは2011年１月から12月までの第74回から第87回までの活動を示す。また、その活動の内容を表４に、支援活動参加者数を表５に示す。

表４　集団支援活動の内容

回	活　動　日	活　動　内　容
７４	平成２３年　１月１２日	• あけましておめでとう!!「宝箱」落としゲーム
７５	平成２３年　１月２６日	• もうすぐ節分！ワクワクドキドキ☆鬼退治
７６	平成２３年　２月　９日	• 思い出のアルバムを作ろう♪
７７	平成２３年　４月２７日	• ペタペタコロコロ♪ペイント遊び
７８	平成２３年　５月１１日	• おきなわのあそび～からだをつかって遊ぼう～ （４人組ケンケン、馬乗りじゃんけんなど）
７９	平成２３年　５月２５日	• 立体☆ペーパークラフトでまちづくり
８０	平成２３年　６月　８日	• ツユコレ♪～世界に一つだけのカサ&カッパ～
８１	平成２３年　６月２２日	• みんなで作ろう！ドキドキ★しんけいすいじゃく
８２	平成２３年　７月１３日	• オリジナル道具でわくわく♪きらきら☆しゃぼん玉
８３	平成２３年　７月２７日	• みんなで作ろう！ダンボールの王国☆
８４	平成２３年　８月２０日	【特別企画】in 国頭 • ウォークラリーをしよう • みんなでバーベキューをしよう • どろんこクルージング（製作の部・活動の部）
８５	平成２３年１０月２６日	• 紅白スポーツフェスティバル2011
８６	平成２３年１１月　９日	• うちわパタパタぷわミントン
８７	平成２３年１２月１４日	• クリスマスパーリー

表５　支援活動参加者数

参加者数／活動日	子ども	親	学部学生・特別専攻科	他学部学生	院生	特別支援教育支援員	近接領域他大学学生	現職教員	近接領域の専門家	センタースタッフ	その他	合計
第74回 1月12日	9	8	5	4	2	6	0	3	1	2	0	40
第75回 1月26日	9	8	8	2	2	5	0	2	1	2	0	39
第76回 2月9日	5	5	7	4	2	5	0	2	1	2	0	33
第77回 4月27日	7	6	6	1	4	0	0	4	1	2	1	32
第78回 5月11日	5	5	6	1	4	2	0	1	1	2	2	29
第79回 5月25日	3	3	5	1	4	1	0	1	1	2	1	22
第80回 6月8日	5	5	4	1	3	1	0	1	1	2	1	24
第81回 6月22日	3	3	3	1	4	0	2	1	0	2	0	19
第82回 7月13日	3	3	4	0	4	0	0	0	1	2	0	17
第83回 7月27日	3	3	4	1	4	3	0	7	1	2	1	29
第84回 8月20日	9	7	0	0	6	0	0	6	1	3	1	33
第85回 10月26日	6	6	13	0	3	2	0	2	0	2	0	34
第86回 11月9日	5	5	13	0	2	2	0	2	0	2	0	31
第87回 12月14日	7	8	13	0	3	2	0	1	1	2	1	30

(2) 公開セミナー（実践トータル支援プログラムの研究成果報告）及び研修会

1）公開セミナー

地域社会への貢献を目的にした公開セミナー（センター活動の実践研究成果の報告）を『支援を必要とする子どもたちの豊かな発達と教育の創造』というテーマのもと、会場琉球大学法文学部新棟215教室において、平成24年２月５日(日)に開催した。田中千穂子（花クリニック、元東京大学)、古田直樹(京都市児童福祉センター）をお招きし、基調講演および研究成果の報告に対するコメントを頂き、教員、保育士、学生、発達支援に携わる専門家、支援員、保護者など様々な領域の方々にご参加いただき実りのあるセミナーとなった。実践研究報告は当センターで行っているトータル支援教室の集団支援を中心に報告し、さらにトータル支援教室の実践を教育実践へ生かして行った国頭地区の特別支援学級間の交流学習についての報告も行った。また、国頭地域、八重山地域でのトータル支援活動についての成果報告も行った。セミナー終了後に回収したアンケートからは、発達障がい児への対応が求められていることからセンターが相談支援を行う必要性の高さやもっと広報を行ってほしいなど様々なニーズを知ることができた。学校および教育関係機関を含めた各領域の専門機関からの参加者に実践から学ぶ教育の機会を提供することができたのではないかと思われる。また、地域のニーズの収集や活動への関心の度合いを確認することができた。前回のセミナーに引き続き、教員、保育士、保護者のみならず、市町村教育委員会、県市町村福祉部局等の参加があり教育、

福祉、医療の領域から多くの発達支援、特別支援教育に熱心な関係者の参加を得ることができ、センターの取り組みへの関心の高さを感じた。また、教育の領域を超えて医療や福祉の多くの専門家の参加が見られたことは今後のセンターを拠点としたネットワーク作りの発展の可能性を感じさせるセミナーとなった。

公開発達支援教育実践セミナー『支援を必要とする子どもたちの豊かな発達と教育の創造』

日　時：平成24年２月５日　日曜日　10時30分～16時30分
会　場：琉球大学法文学部新棟215教室
後　援：沖縄県　沖縄県教育委員会　沖縄県発達障害者支援センター　琉球大学地域連携推進課　国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会
参加者：約170人
司　会：浦崎武：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター専任
講　師：田中千穂子（花クリニック、元東京大学）、古田直樹（京都市児童福祉センター）

１部：実践報告：
支援を必要とする子どもたちの遊びを通した集団支援と教育実践
（発達支援教育実践センター：トータル支援教室の実践研究）10時35分～12時
『社会性を育てる遊びの場のもつ力：子どもと子どもの楽しい関わりの場と学生、教員、支援員、専門家の交流による学びあいの場（トータル支援教室について）』
崎濱朋子（沖縄市立比屋根小学校教諭、センター特別研究員）
『遊びの多様性による子どもの理解と発達支援と教育実践（トータル支援教室の活動報告）』
武田喜乃恵（センター相談員、特別研究員）
宮脇絵里子（那覇市立高良小学校教諭、センター特別研究員）
『遊びを通した「自立活動」と遠隔地間の交流学習：国頭地域の授業実践（大学のトータル支援教室から教育実践へ）』
瀬底正栄（東村立東小学校教諭、センター特別研究員）
『八重山地域トータル支援および実践研修ネットワークの構築と国頭地域との交流トータル支援活動の展開』
入嵩西清幸（八重山教育事務所、指導主事）
大城麻紀子（県立森川特別支援学校教諭、センター特別研究員）
実践報告に対するコメント
田中千穂子（花クリニック、元東京大学）
古田　直樹（京都市児童福祉センター）

２部：基調講演：
「発達障害」と呼ばれる子どもたちの遊びによる多様な体験と育ちと学びを考える
『子どもたちの表現活動による包括的な理解と支援』
古田直樹（京都市児童福祉センター）
『子どもたちの遊びによる多様な体験と育ちと学び』
田中千穂子（花クリニック、元東京大学）
質疑応答・討論『遊びの多様性から子どもたちの育ちと学びを考える』
講師・発表者他

２）研修会
「発達支援・教育実践の実際」についての研修会を２月４日（土）に開催した。
日　時：平成24年２月４日(土)　９時30分～12時
会　場：琉球大学法文学部３階304教室
研修①
講　師：古田直樹氏（京都市児童福祉センター　心理司、臨床心理士、臨床発達心理士）
内　容：発達支援：発達アセスメントとコミュニケーション
研修②
講　師：後藤真吾氏（滋賀県立野洲養護学校教員、臨床発達心理士、言語聴覚士）
内　容：教育実践：特別支援教育における発達的視点による教育実践の実際
参加者：32名

(3) 離島・へき地支援活動

地元の新聞報道（八重山毎日新聞平成20年１月19日に掲載）において、発達支援教育実践センターの八重山の周辺離島への継続的な支援の必要性が取り上げられて以来、相談支援、学校訪問、大学において定例で行っている事例研究会を出張して行う取り組みを継続的に行ってきた。平成20年の第１回は外部相談員として山上雅子氏（元京都女子大学、心理相談室ハタオリドリ）の協力を得て、専任教員浦崎武、事例提供者として当時、大学院生の武田喜乃恵

の３人で参加した。そして第２回は平成21年３月５日、６日に当時のセンター長奥田実、専任浦崎武、特別研究員の瀬底正栄、崎濱朋子、武田喜乃恵および現職教員の金城明美、６人で教育学部共同研究経費によりスタッフの人数を増やして出前トータル支援教室を開催した。第４回八重山出前支援は学部プロジェクトとして21世紀おきなわ子ども教育フォーラムに参画し実施した。第１回、東村出前支援に関しては財団法人宇流麻財団の助成を得て行った。第５回、第６回八重山出前支援は第４回同様、学部プロジェクトとして21世紀おきなわ子ども教育フォーラムに参画し実施した。第５回の記事は平成22年３月８日八重山毎日新聞に、同年３月18日に琉球新報に、第６回の記事は平成22年９月４日、５日に地元紙八重山毎日新聞、同年９月12日に琉球新報に掲載された。第２回東村教育委員会の連携により東村立東小学校で出前支援を10月に行う予定であったが台風の影響を受けて中止となった。第６回～８回の八重山出前支援は平成23年３月４日～５日、同年６月17日～19日、同年10月14日～16日に行った（海を活かした教育に関する実践研究・21世紀おきなわ子ども教育フォーラム）。八重山地域の教諭、支援員による現地スタッフが参加し、支援活動を行った。

離島・へき地における八重山出前支援における臨床活動のセッション数を表１に、診断別内訳を表２に、地域別内訳を表３に示す。

１）八重山地域に関わる支援活動

①　第６回　平成23年３月（八重山教育事務所との連携）：支援プログラム

参加者総数63人

Ａ．発達支援教育相談１

平成23年３月４日(金)　10時～15時

担　当：浦崎　武（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　准教授）

- 一組の相談時間は50分、計４組（４人）の相談を行った。

Ｂ．実践研修会

平成23年３月４日(金)　15時30分～17時

発表者：崎濱朋子（沖縄市立中の町小学校）、瀬底正栄（東村立東小学校）ほか

参加者：18人

- 『支援を必要とする子どもたちの社会性を育てる集団支援と教育実践』について報告し、集団支援教室の活動内容を教育課程に位置付け、実際に特別支援学級や通常学級で取り組んだ教育実践について発表した。
- 石垣市内の特別支援学級担任教諭が参加した。

Ｃ．トータル支援教室（集団支援教室）

平成23年３月５日(土)　９時30分～11時50分

参加者：28人、子ども８人（内兄弟１人）、親７人、本島支援スタッフ７人、八重山現職教員５人、支援員１人

- 事前の説明会20分、集団適応支援教室60分、反省会45分で行った。
- 教員や保育士と対象児各１名が組になって８組の参加で行った。

Ｄ．情報交換会「八重山における子どもたちの支援の状況について」

平成23年３月５日(土)　12時～12時30分

参加者：11人

- 発達支援教育に関心のある教員、保育士、関連領域の専門家で情報交換を行った。

Ｅ．発達支援教育相談２

平成23年３月６日(日)　10時～12時

担　当：浦崎　武（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　准教授）

- 一組の相談時間は50分、計２組（２人）の相談を行った。

②　第７回八重山出前支援　平成23年６月（八重山教育事務所との連携）：支援プログラム　参加者総数148名

Ａ．保護者説明会

平成23年６月17日(金)　10時～12時

担　当：浦崎　武（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　准教授）
武田喜乃恵（同センター相談員、特別研究員）

参加者：４人

- 集団支援教室に参加する保護者を対象にした説明会を実施した。

Ｂ．発達支援教育相談

平成23年６月17日(金)　13時30分～16時30分

担　当：浦崎　武（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　准教授）

- 一組の相談時間は50分、計５組（５人）の相談を行った。

Ｃ．協働会議１及び情報交換会

平成23年６月17日(金)　18時～19時

連携関係部局“トータル支援ネットIN八重山”のメンバーで、八重山の発達支援や特別支援教育の今後の発展のために情報交換、意見交換を行った。

参加者：15人

D．実践研修会
平成23年６月18日(土)　10時～12時
参加者：31人
E．トータル支援教室（集団支援教室）
平成23年６月18日(土)　13時30分～16時
指　導：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター特別研究員、学生
参加者：57人、子ども16人（内兄弟５人）、支援スタッフ８人（センター長１人、センター専任１人、特別研究員・現職教員６人）、現地教員・支援員18人、親10人、その他５人
- 事前の説明会10分、集団適応支援教室60分、反省会60分で行った。
- 教員や保育士と対象児各一名が組になって11組の参加で行った。

F．協働会議２
平成23年６月18日(土)　16時～17時
参加者：17人
G．支援員研修会
平成23年６月19日(日)　９時～10時30分
参加者：19人

③八重山現地スタッフ出張研修　平成23年７月
- 八重山地域の幼稚園教諭１人、小学校教諭２人、支援員１人の計４人が実践研修に参加した。

場　所：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター
A．事前研修
平成23年７月27日(水)　13時30分～17時30分
B．トータル支援教室
平成23年７月27日(水)　18時30分～20時30分
C．事後研修
平成23年７月28日(木)　10時～16時30分

④　第８回八重山出前支援　平成23年10月（八重山教育事務所との連携）：支援プログラム　参加者総数77人
A．発達支援教育相談
平成23年10月14日(金)　10時～15時
担　当：浦崎　武（琉球大学教育学部　准教授）
- 一組の相談時間は50分、計３組（３人）の相談を行った。

B．協働会議１
対　象：関係者
平成23年10月14日(金)　18時～19時
連携関係部局“トータル支援ネット IN 八重山”のメンバーで、八重山の発達支援や特別支援教育の今後の発展のために情報交換、意見交換を行った。
参加者：17人
C．トータル支援教室（集団支援教室）
平成23年10月15日(土)　13時30分～16時
参加者：33人、子ども10人（内兄弟１人）、親８人、本島支援スタッフ７人、八重山現職教員・支援員８人（内支援員１名）
- 事前の説明会20分、集団適応支援教室60分、反省会１時間で行った。
- 教員や保育士と対象児各一名が組になって９組の参加で行った。

D．協働会議
平成23年10月15日(土)　16時～17時
参加者：13人
- 支援教室の活動内容がもたらす子どもたちに与える影響を考えることを通して、それぞれの子どもたちの活動の様子から個々の子どもたちの実態を捉え、関わりのあり方を考えた。

E．実践事例検討会
対　象：教員・保育士・支援員
平成23年10月16日(日)　９時30分～12時
参加者：11人
学校現場の事例から、子どもの支援についてみんなで色々な視点から意見を出し合い検討した。

⑤　第１回八重山スタッフによる集団支援教室（第９回八重山出前支援）　平成23年11月
平成23年11月25日(金)　18時～20時
場　所：八重山教育事務所
内　容：事前準備、集団支援教室、保護者会、事後ミーティング
参加者：子ども：６人（４歳～小２）、保護者：５人、支援者：６人（幼稚園教諭：２人、小学校教諭：３人、中学校教諭：１人）琉大スタッフ：２人
現地スタッフが中心となり、集団支援活動を行った。

⑥　八重山支援報告（発達支援教育実践セミナー）　平成24年２月
平成24年２月５日(日)　10時30分～16時30分
場　所：琉球大学法文新棟215教室
- 発達支援教育実践セミナーにおいて、「八重山地域トータル支援および実践研修ネットワークの構築」について報告を行った。

⑦　第２回八重山スタッフによる集団支援教室（第10回八重山出前支援）　平成24年２月
平成24年２月17日(金)　18時30分～20時30分
場　所：八重山教育事務所

内　容：トータル支援教室、保護者会、事後ミーティング
参加者：子ども：３人（幼稚園生～小２）、保護者３人、支援者：６人（幼稚園教諭：１人、小学校教諭３人、特別支援学校教諭１人、特別支援教育支援員１人）、琉大スタッフ：２人、その他：１人、現地スタッフが中心となり集団支援活動を行った。

⑧　21世紀子ども教育フォーラム最終報告会　平成24年３月
平成24年３月４日(土)
場　所：琉球大学法文新棟215教室

２）国頭地区に関わる支援活動

①　トータル支援教室の出前支援　平成23年８月（国頭教育事務所との連携）
場　所：金武町ネイチャー未来館
平成23年８月20日(土)
参加者：児童生徒９名、保護者９名、団長及び支援スタッフ14名、学生６名、計38名
プログラム：ウォークラリー、バーベキュー、泥んこクルージング

②　国頭支援報告（発達支援教育実践セミナー）平成24年２月
平成24年２月５日(日)　10時30分～16時30分
場　所：琉球大学法文新棟215教室
- 発達支援教育実践セミナーにおいて、「みんなで遊ぼう！わくわく日帰りキャンプ～国頭地域との交流トータル支援活動の展開～」について報告を行った。

表１　八重山臨床活動　セッション数

相談の形態	３月	６月	10月	合計
保護者相談会（カウンセリング含む）、面接セッション数	4	6	3	13
教員相談会（スーパーヴィジョン含む）、面接セッション数	1	0	2	3
トータル支援教室（集団適応支援）セッション数	1	1	1	3
実践事例研究会（グループスーパーヴィジョン）セッション数	0	0	2	2
セッション総数	6	7	8	21

表２　八重山臨床活動　診断別内訳

診　断　名	３月	６月	10月	合計
アスペルガー障害（高機能自閉症）	0	1	4	5
注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）	1	1	0	2
精神遅滞（知的障害）	2	1	0	3
広汎性発達障害（自閉症）	4	5	2	11
学習障害（ＬＤ）	0	0	0	0
情緒障害（虐待、緘黙、不登校含む）	0	0	0	0
聴覚障害	0	0	0	0
言語障害	0	0	0	0
ダウン症候群	0	2	1	3
境界知能	0	0	2	2
身体障害	1	0	0	1
その他	1	2	1	4
計	9	12	10	31

表３　相談ケースの地域別事例内訳

相談ケースの地域別内訳	３月	６月	10月	合計
石垣市	9	7	10	26
竹富町（西表島）	0	5	0	5
総　　計	9	12	10	31

(4) 学校、保育園訪問支援活動

本年は那覇市、宜野湾市を中心に学校、保育園の訪問支援を行った。保育園を含め６学校・園に訪問し相談を受けた。そのうち５園は月１回定期巡回の訪問支援となった。

(5) 他機関および附属小・中学校との連携支援

①島嶼地域出張教育相談支援　八重山教育事務所との連携支援
教育相談会、実践事例研究会、トータル支援教室の出前

②特別支援教育支援員養成支援　読谷村教育委員会との連携支援
トータル支援教室における特別支援教育支援員

の実践力養成支援

③特別支援教育支援員養成支援　那覇市教育委員会との連携支援

トータル支援教室における特別支援教育支援員の実践力養成支援

④連携支援　附属小学校との連携支援　校内委員会の実施、子どもの適応支援

- 発達が気になる子どもの適応支援、トータル支援教室への参加

3．学生、院生、特別研究員への教育活動

(1) 実践トータル支援活動

発達障害のある子どもたちや気がかりな子どもたちとの活動を通して子どもたちとの関わり方や支援のあり方を学び、将来、発達支援教育、特別支援教育に貢献できる学生や院生を育成すること、子どもたちの支援教育に携わる研究員の実践力を高めることを目的として教育活動を行っている。実践トータル支援活動のなかで「発達支援教育実践Ａ」、「発達支援教育実践Ｂ」、「軽度発達障害児の臨床心理」を受講している学生は集団支援に参加し、グループで集団支援活動を企画し、集団支援の実践および集団のなかで個と関わる能力を養う。院生においては「軽度発達障害者支援特論」を受講すると担当する子どもの個別支援の実践力を養うことができ、さらに「特別支援教育特論Ｂ」を受講する院生は個別支援における関わりを整理し分析する能力を養う。当センターは子どもたちへの支援活動を通して実践力を備えて教育現場で活躍できる人材を育てる教育を行っている。

(2) 実践事例研究会

実践事例研究会において、院生、特別研究員が実践事例の報告を行い、特別支援学校教員、小学校教員、中学校教員、保育士、臨床心理士、医師、言語聴覚士、大学教員、院生、特別支援教育支援員などの参加によりコメントをもらった。

1）実践事例検討会による院生への実践教育および特別研究員のリカレント教育

第47回、第53回、第56回、第57回は特別研究員、第52回、第55回は院生が実践事例を報告し、第48回、第54回は発達支援教育実践センターの専任教員が実践事例を報告した。参加者と事例について議論を行い、多面的な意見をもらった。

- 第47回　実践事例研究会（第８回特例会）

発 表 者：琉球大学教育学部発達支援教育実践センター　特別研究員

タイトル：『トータル支援教室へ参加する小学６年生男児の４年間の育ち』

コメント：滝川一廣（学習院大学教授）

日　　時：１月21日　18時30分

参 加 者：18名

- 第48回　実践事例研究会（第９回特例会）

発 表 者：琉球大学教育学部　教員

タイトル：『アスペルガー障害と診断された中学生男児との10年間の歩み―自己意識の揺らぎのなかで保育園、学校、家庭のあり方―』

コメント：滝川一廣（学習院大学教授）・浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）

日　　時：１月23日　10時

参 加 者：14名

- 第52回　実践事例研究会

発 表 者：琉球大学大学院　院生（さぽーとせんたーｉ　作業療法士）

タイトル：『小学３年生男児との個別支援ー絵をストーリー仕立てに描く愛嬌のあるＡ君ー』

日　　時：６月15日　18時30分

参 加 者：11名

- 第53回　実践事例研究会

発 表 者：琉球大学教育学部発達支援教育実践センター　特別研究員

タイトル：『小学１年生男児とのプレイルームでの関わりー友だちとうまく関われないＡ君ー』

日　　時：７月20日　18時30分

参 加 者：14名

- 第54回　実践事例研究会

発 表 者：琉球大学教育学部　教員

タイトル：『学童期のアスペルガー症候群と関係発達支援』

日　　時：９月22日　18時30分

参 加 者：14名

- 第55回　実践事例研究会

発 表 者：琉球大学大学院　院生（泡瀬特別支援学校　教員）

タイトル：『子ども理解に必要な発達的視点の明確化― 発話と視線解析の比較から ―』

日　　時：10月19日　18時30分

参 加 者：16名

- 第56回　実践事例研究会

発 表 者：東村立東小学校　教員（センター特別

研究員）

名護市立久辺小学校　教員、本部町立本部小学校　教員

タイトル：『国頭地区特別支援学級における「遊び」を取り入れた交流学習の取り組み～児童一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実～』

日　　時：11月16日　18時30分

参 加 者：13名

• 第57回　実践事例研究会

発 表 者：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　相談員

タイトル：『自閉的傾向を伴う知的障害のある小学校高学年男児に対する関係性に焦点を当てた支援―プレイルームにおける関わりを通して―』

日　　時：12月22日　18時30分

参 加 者：９名

• 第59回　実践事例研究会（第10回特例会）

発 表 者：教育学部附属発達支援教育実践センター相談員（センター特別研究員）
琉球大学教育学部　教員

タイトル：事例１『学童期の子どものプレイセラピー』
事例２『自己存在基盤の揺らぐ中学２年生の広汎性発達障がい児への自己同一性の獲得へ向けての遊戯面接の実際』

コメント：田中千穂子（花クリニック、元東京大学）
古田直樹（京都市児童福祉センター）

日　　時：平成24年２月４日　14時30分～18時30分

参 加 者：25人

２）公開特別支援セミナー

• 実践トータル支援活動の研究報告

司会：浦崎武：発達支援教育実践センター専任

１部：トータル支援教室実践研究報告：

支援を必要とする子どもたちの遊びを通した集団支援と教育実践

『トータル支援教室について』
（センター特別研究員）

『トータル支援教室の５年間の活動成果』
（センター特別研究員グループ）

『トータル支援教室から教育実践への展開：国頭地域の授業実践』
（東村立東小学校センター特別研究員）

『「トータル支援教室 IN 八重山」による八重山トータル支援ネットワークの展望』
（八重山地域グループ）

実践報告に対するコメント
（田中千穂子：花クリニック、元東京大学教授・古田直樹：京都市児童福祉センター）

２部：基調講演：

「発達障害」と呼ばれる子どもたちの遊びによる多様な体験と育ちと学びを考える

『子どもたちの表現活動による包括的な理解と支援』
（古田直樹：京都市児童福祉センター）

『子どもたちの遊びによる多様な体験と育ちと学び』
（田中千穂子：花クリニック、元東京大学）

質疑応答・討論『遊びの多様性から子どもたちの育ちと学びを考える』
（講師・特別研究員他）

(3) センター専任教員の授業担当

センター専任教員は、当センターでの取り組みに参加し実践を学ぶことをねらいとして、平成21年度から学部への提供授業『発達支援教育実践Ａ』、『発達支援教育実践Ｂ』を開設した。また、特別支援教育専攻の選択必修授業を担当している。平成23年度は以下の授業を担当した。

学部１年～４年　「発達支援教育実践Ａ」、「発達支援教育実践Ｂ」
学部３年　「軽度発達障害児の臨床心理」
大学院　「特別支援教育特論Ｂ」
大学院　「障害児臨床心理学特論」
大学院　「軽度発達障害者支援特論」
大学院　「障害児教育の実践研究Ⅴ」

(4) センター特別研究員およびセンター事業による研究論文

• 2012年３月（浦崎武　武田喜乃恵　瀬底正栄　宮脇絵里子　崎濱朋子　大城麻紀子）「トータル支援教室」関連紀要　発達障がい児への他者との関係性による相互作用が及ぼす集団の場のもつ力の生成過程～集団支援企画‘ペタペタコロコロ　うみのせかい’～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号
• 2012年３月（浦崎武　瀬底正栄）「トータル支援教

室」関連紀要　トータル支援教室の支援計画と特別支援学級における交流学習の授業計画の比較検討～トータル支援教室の支援要素の学校の授業実践への還元～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号

- 2012年３月（瀬底正栄　山城直人　金城あかね）遠隔地間の特別支援学級における「遊び」を取り入れた交流学習の取り組み　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号
- 2012年３月(金城明美　浦崎武)　知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援 (2) ―指示に反応し怒りを表出する小４男児とのかかわり―　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要第３号

(5) 大学院生の修士指導論文および修了後による公表論文

- 2011年１月（新垣香代子）人との関係に問題をもつ子どもたち＜発達臨床＞研究会
  ：時計に興味があるＡさんと他者とのかかわり発達，125

４．研究教育活動

(1) 実践事例研究会

平成18年10月から月１回定期、水曜日に院生、現職教員、コーディネーター、特別支援教育関係者、その他の近接領域の関係者が参加して実践研究を行ってきた。

第４回は特例会として麻生武氏（奈良女子大学)、山上雅子氏（元京都女子大学、心理相談室ハタオリドリ）がコメンターとして参加された。また、第11回には浜田寿美男（奈良女子大学）氏、麻生武氏、山上雅子氏の他、京都の発達研究会との共同研究会が開かれた。第22回は京都発達研究会から山上雅子氏をお招きして開催された。また、第24回の特例事例研究会では発達支援教育実践センターの研究会メンバーが奈良女子大学に出向き、第２回沖縄・京都発達研究会合同研究会が開かれた。関西地区以外にも東北地区、関東地区、中部地区からも参加者が来られた。第47回（第８回特例会）事例研究会では滝川一廣氏（学習院大学）が、第48回（第９回特例会）事例研究会では滝川一廣氏（学習院大学）と浜田寿美男氏（奈良女子大学名誉教授）をお招きして開催した。

今年度は、第59回（第10回特例会）事例研究会で、田中千穂子氏（花クリニック）と古田直樹氏（京都市児童福祉センター）をお招きして開催した。

- 第47回　実践事例研究会（第８回特例会）
  発 表 者：琉球大学教育学部発達支援教育実践センター　特別研究員
  タイトル：『トータル支援教室へ参加する小学６年生男児の４年間の育ち』
  コメント：滝川一廣（学習院大学）
  日　　時：１月21日　18時30分
  参 加 者：18名
- 第48回　実践事例研究会（第９回特例会）
  発 表 者：琉球大学教育学部　教員
  タイトル：『アスペルガー障害と診断された中学生男児との10年間の歩み―自己意識の揺らぎのなかで保育園、学校、家庭のあり方―』
  コメント：滝川一廣（学習院大学教授）・浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）
  日　　時：１月23日　10時
  参 加 者：14名
- 第49回　実践事例研究会
  発 表 者：しののめ保育園　保育士
  タイトル：『未熟児で生まれた双子の保育園生活（３年間）～友だちがいたからこんなに大きくなれました～』
  日　　時：３月16日　18時30分
  参 加 者：21名
- 第50回　実践事例研究会
  発 表 者：仲原保育園　保育士
  タイトル：『ダウン症の子の育ち』
  日　　時：４月20日　18時30分
  参 加 者：31名
- 第51回　実践事例研究会
  発 表 者：あいのもり保育園　保育士
  タイトル：『すだちのきろく』
  日　　時：５月18日　18時30分
  参 加 者：18名
- 第52回　実践事例研究会
  発 表 者：琉球大学大学院　院生（さぽーとせんたーｉ　作業療法士）
  タイトル：『小学３年生男児との個別支援―絵をストーリー仕立てに描く愛嬌のあるＡ君―』
  日　　時：６月15日　18時30分
  参 加 者：11名
- 第53回　実践事例研究会
  参 加 者：琉球大学教育学部発達支援教育実践センター　特別研究員

タイトル：『小学１年生男児とのプレイルームでの関わり－友だちとうまく関われないＡ君－』
日　　時：７月20日　18時30分
参 加 者：14名

- 第54回　実践事例研究会
発 表 者：琉球大学教育学部　教員
タイトル：『学童期のアスペルガー症候群と関係発達支援』
日　　時：９月22日　18時30分
参 加 者：14名

- 第55回　実践事例研究会
発 表 者：琉球大学大学院　院生（泡瀬特別支援学校　教員）
タイトル：『子ども理解に必要な発達的視点の明確化－発話と視線解析の比較から－』
日　　時：10月19日　18時30分
参 加 者：16名

- 第56回　実践事例研究会
発 表 者：東村立東小学校　教員（センター特別研究員）
名護市立久辺小学校　教員、本部町立本部小学校　教員
タイトル：『国頭地区特別支援学級における「遊び」を取り入れた交流学習の取り組み～児童一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実～』
日　　時：11月16日　18時30分
参 加 者：13名

- 第57回　実践事例研究会
発 表 者：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　相談員
タイトル：『自閉的傾向を伴う知的障害のある小学校高学年男児に対する関係性に焦点を当てた支援－プレイルームにおける関わりを通して－』
日　　時：12月22日　18時30分
参 加 者：９名

- 第58回　実践事例研究会
発 表 者：発達障害者当事者会　代表
タイトル：『発達障害と青年期・成人期』
日　　時：１月18日（平成24年）　18時30分
参 加 者：11名

- 第59回　実践事例研究会（第10回特例会）
発 表 者：琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター　相談員
琉球大学教育学部　教員
タイトル：事例１『学童期の子どものプレイセラピー』
事例２『自己存在基盤の揺らぐ中学２年生の広汎性発達障がい児への自己同一性の獲得へ向けての遊戯面接の実際』
コメント：田中千穂子（花クリニック）
古田直樹（京都市児童福祉センター）
日　　時：２月４日（平成24年）　14時30分
参 加 者：25名

(2) 実践研究公開報告

２月５日(平成24年)のセミナーにおいて実践トータル支援活動の成果およびその取り組みの成果や学校で行った授業における実践研究の報告、八重山地域等でのトータル支援活動の報告を行い、田中千穂子（花クリニック、元東京大学）氏、古田直樹（京都市児童福祉センター）氏から貴重なコメントを頂いた。

(3) 国立大学障害児教育関連施設・センター共同研究

国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会の会員が連携研究者となって共同研究を行った。平成20～23年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ、課題番号　20330194)、研究課題は『小学校教員養成プログラムにおける特別支援教育スタンダードの開発』である。

(4) 実践研究論文の作成

２月４日に実践研究の公開発表を行った事例を中心にトータル支援活動の実践の成果、実践事例研究会の検討事例に関する実践研究の成果を以下の論文にまとめた。

１）トータル支援教室報告：研究論文

- 2011年３月（浦崎武　武田喜乃恵）学童期を中心とした社会性のサポートの必要な子どもたちへのグループ支援－トータル支援教室の支援企画‘ツユコレ’の成果から　アスペハート27号
- 2012年３月（浦崎武　瀬底正栄)「トータル支援教室」関連紀要　トータル支援教室の支援計画と特別支援学級における交流学習の授業計画の比較検討～トータル支援教室の支援要素の学校の授業実践への還元～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号
- 2012年３月(金城明美　浦崎武）知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援 (2) －指示に反応し怒りを表出する小４男児とのかかわり－琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター

紀要　第３号

２）事例研究会：研究論文

- 2012年３月（瀬底正栄　山城直人　金城あかね）遠隔地間の特別支援学級における「遊び」を取り入れた交流学習の取り組み　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号
- 2012年３月(浦崎武)　自閉症スペクトラム障害児における他者への同一化と自己存在に関する不安の軽減～フラッシュバックからの自己形成過程と他者との関係性の形成による支援～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号

３）公開セミナー報告：研究論文

- 2012年３月（浦崎武　武田喜乃恵　瀬底正栄　宮脇絵里子　崎濱朋子　大城麻紀子)「トータル支援教室」関連紀要　発達障がい児への他者との関係性による相互作用が及ぼす集団の場のもつ力の生成過程～集団支援企画‘ペタペタコロコロ　うみのせかい’～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号
- 2012年３月（瀬底正栄　山城直人　金城あかね）遠隔地間の特別支援学級における「遊び」を取り入れた交流学習の取り組み　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号

４）紀要：発達支援教育実践センター専任研究論文

- 2011年８月（浦崎武）震災の中で生きる子ども：＜支えられる－支える＞土壌と子どもたちがもつ＜生きるための力＞の育ち－過去の震災、戦争の体験記と東日本大震災の記事より－　発達，128
- 2011年８月（浦崎武）学齢期のアスペルガー症候群と関係発達的支援　そだちの科学17号
- 2012年３月(浦崎武)　自閉症スペクトラム障害児における他者への同一化と自己存在に関する不安の軽減～フラッシュバックからの自己形成過程と他者との関係性の形成による支援～　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要　第３号

(5) 発達研究会

毎月１回、大学院生、現職教員、発達支援に携わる専門家を対象に発達研究会を開いている。実践教育を行う上で基礎となる発達理論を学ぶ会を開いている。

(6) 定期刊行物の発行

定期刊行物として「発達支援教育実践センター紀要」を発行している。平成24年３月には第３号を発行した。

(7) 研究資料の提供

- トータル支援教室の活動に関することや支援を受けている子どもたちとの関わりについて報告し、実践支援セミナーにおいて資料として配布した。
- 実践支援セミナーにおいてトータル支援教室で行っている企画を学校で活用できるように指導案にして配布した。

(8) 助成金における研究

１）21世紀おきなわ子ども教育フォーラム

- 八重山出前支援を『21世紀おきなわ子ども教育フォーラム』への参画により行った。

事 業 名：発達支援教育に於ける実践力養成システムの構築と離島・へき地への展開
実施期間：平成23年４月～平成24年３月

２）海を活かした教育に関する実践研究（日本財団）

- 日本財団の助成により海をテーマに支援企画を展開した。

事 業 名：海を活かした発達障害児の支援教育プログラムの開発
実施期間：平成23年４月～平成24年３月

５．その他の活動

(1) 国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会について

毎年度、９月に１度、日本特殊教育学会の開会中に開催される障害児教育関連施設、センター連絡協議会が開かれ、各センターの現状報告を行った。

日　　時：９月25日（日）11時～11時50分
会　　場：弘前大学

(2) その他の社会的活動

センター専任　浦崎武

- 宜野湾市障害児等審査委員会委員
  開 催 日：１月13日（平成24年）
- 宜野湾市障がい児保育実践報告会
  開 催 日：２月16日（平成24年）
- 島尻地区特別支援専門家チーム委員会
  開 催 日：６月29日
- 特別支援教育総合推進事業：島尻地区特別支援連携協議会委員
  開 催 日：２月22日
- 宜野湾市保育園巡回相談員
  依頼期間：４月１日～３月31日
- 那覇市教育委員会学習障害児等専門家チーム巡回
  依頼時期：５月16日～３月31日
- 沖縄県立大平特別支援学校評議員
  期　　間：５月16日～３月31日

- 沖縄県特別支援教育推進事業運営協議会
  期　　間：７月29日～３月31日
- 那覇市就学指導委員会
  期　　間：４月１日～３月31日
- 適応指導教室　講演会
  日　　時：６月22日
  会　　場：県立総合教育センター
- 県教育委員会　カウンセリング実践講座（特別支援教育論）講師
  開 催 日：７月15日、22日、25日、26日
  会　　場：県立総合教育センター
- 特別支援教育夏期講座　講師
  日　　時：７月21日
  会　　場：名護特別支援学校
- 免許法認定講習　講師
  日　　時：８月１日～２日
  会　　場：沖縄盲学校
- 県立特別支援学校10年経験者研修　講師
  日　　時：８月８日
  会　　場：県立総合教育センター
- 那覇市教育委員会　特別支援教育研修会　講師
  日　　時：９月16日
  会　　場：那覇市真和志支所
- 県立高等学校初任者研修　講師
  日　　時：９月29日
  会　　場：県立総合教育センター
- 沖縄特別支援教育研究会　記念講演
  日　　時：12月３日
  会　　場：名護特別支援学校
- 沖縄特別支援教育研究会自閉症部門　コメント
  日　　時：12月３日
  会　　場：名護特別支援学校

６．センター相談員の活動

- センター個別相談（総数82セッション）
  子ども面接：74セッション
  親　面　接：６セッション
  教　　員：２セッション
- トータル支援教室集団活動の企画・運営
  期　　間：１月～12月（計14回）
  場　　所：発達支援教育実践センター
- 八重山支援の企画・運営
  実 施 日：６月、10月、11月、２月（計４回）
  場　　所：八重山教育事務所
- 国頭支援スタッフ
  実 施 日：８月20日
  場　　所：ネイチャー未来館（金武町）
- 附属小巡回相談及び連絡調整
  期　　間：５月～12月
  場　　所：附属小学校
- 附属中教育相談委員会及びカンファレンスへの参加

①教育相談委員会
  期　　間：11月～３月（毎週月曜日）
  場　　所：附属中学校

②スクールカウンセラー及び実習カウンセラー合同カンファレンス
  期　　間：11月～３月（毎週金曜日）
  場　　所：教育学部220教室

- 附属小・中学校特別支援教育支援員サポートミーティング
  期　　間：10月～３月（不定期）
  場　　所：発達支援教育実践センター
- 附属中支援員及び数学科教員カンファレンス
  実 施 日：10月、12月、３月（計３回）
  場　　所：附属中学校